

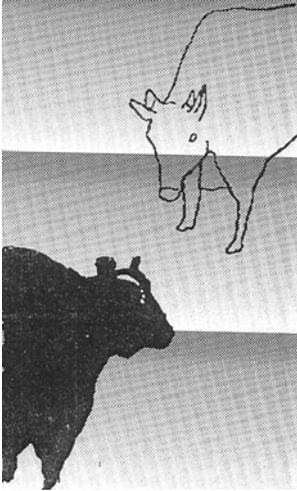
八幡平のマイヤー牧場の

黒牛オーロックス

陶 易 王

雨が上がつて、岩手山の山並みがくつきりと見える。
マイヤー牧場の黒牛オーロックスは、牧草を食べてはもくもく反芻していた。

麓の方から、一頭の若い赤牛が斜面を上つて来た。
「おはよう、オークスさん！」



「ああ、おはよう。君は新顔だね。どこから来たの？」
「私、モモ。スウェーデンのスカンセン牧場から来たの。今

ヨーロツパの牧場は狂牛病でパニックなの」

「狂牛病っていったい何かね？」

「今、ヨーロツパで流行っている牛の病気。これにかかると牛が最初ふらふらして狂った様に走り回り周りの人に突つかかって最後に腰が抜けたように倒れて死んでしまふ。その様子がまるで狂犬病みたいなので、狂牛病と呼ばれました」

「不思議な病気だね。その病理は？」

「狂牛病で死んだ牛を解剖してみると脳がスポンジみたいに膨らんで、小さな空洞が沢山あつたので、大脳スポンジ病とも呼ばれました」

「これは感染するの？」

「脳を調べると、ウイルスに似た感染性プリオンが認められたので、プリオン病とも呼ばれました」

「それは予防できるのかね？」

「今のところ治療も予防法もない。だから発病した牧場の牛は全部屠殺されるのです」

「そんな馬鹿な！」

「だから、私の牧場主ハンスさまはノアの箱舟みたいに、私たち無病の牛たちを船に乗せてはるばる八幡平のマイヤー牧場に移住して来たのです」

「殺さなくても治療する方法はないのかね」

「私達はもともと草を食べ、ゆっくり反芻して生きてきたの

です。それを牧場主達は、肉を取った残りの滓、骨、神経筋、蹄等を捨てないで混ぜ粉砕して肉骨粉を作り配合飼料に混ぜて食べさせたのです」

「それじゃ、共食いじゃないか。そんな物を食べさせられたの？」

「それが、草に比べてカロリーが高く消化不良も起こさず牛の体重も増加したので、全ヨーロッパ中に広がり、それを食べから病気が発生したのです」

「そつだとも。共食いなど神様がお許しにならないよ！」

邂逅

実近伊代

その日、バーテンダーのKは店を二日ほど臨時休業にし、新幹線でY市にやってきた。

以前から機会があればと思っていたあるバーを訪れるためそこは、くち伝ででなければ探しようのない、住宅街のなかの狭い路地にある建物の二階にあった。

路地に面した側壁の二階部分に小さな窓がひとつだけあり、

「ニューギニアの原住民に人間を食べる習慣があつて、人間の肉を食べた人がこの病気になつて死んでいる事が判つて、牛でも肉骨粉を止める動きが出てきました」

「そつだよ。共食いするから神様の罰が当たつたのだ。君も騒ぎが収まるまでずつと此処にいろといひ」

オーロックスは首を振つてうなずき草を食べ始めた。

麓から牛たちがぞろぞろ上つてくる。教会の鐘が響いてきた。

牧場は風もなく静か、暖かな陽ざしは限りなく平和でした。頭上の闇にぼんやりと柔らかな灯りを投げかけている。立ち止まつて見上げても余程眼がよくなければ、その窓際にWALTONBARという文字を読み取ることはできない。他にはどこを見回しても看板ひとつないのだ。実は、Kの店にぐるぐる或る客から、この隠れ家のような店の話を聞いて以来、いつか訪れてみたいと思っていたのだ。

Kは横の階段を昇つていった。くすんだワインカラーの一枚扉の中央に幅三センチほどの細い金色の金属が一枚、上から下まで縦に飾りとして付いていて、胸の高さくらいの位置に、近づいて見なければ読めないほど小さく横書きで二段にWALTONBARと彫つてある。バーテンダーはどんな人物なのだろうと思いつつ扉を開けた。

カウンターのなかでダークスーツに身を固めた女性のパー
テンダーがにこやかに頭を下げかけたが、はっと眼を大きく
見開いた。思わず、Kもその場に立ち竦んだ。

「あつ、君は……N子じゃないか？」

「Kさん……」

N子は驚きを隠さぬ表情でKを見つめた。

「君がいるなんて思いもよらなかつた。いやあ、驚いたな

あ……実はね、この店のことをうちに来るお客さんから

そのひとはこのY市のひとなんだが、聞いていたので、見

学方がた一度来てみたかったのだよ」

「そつだつたのですか。あの、とにかくお掛けになって下

さいませ。随分ご無沙汰してしまつて申し訳ございません。

それに、その節は大変お世話になりました……」

「いやいや、それはこちらの科白だよ。あの頃は店を始め

たばかりで、てんてこ舞いの毎日だったから大助かりだった。

手伝つてもらつて、こちこそ感謝している」

「あら、そんなこと仰られると恥ずかしいですね。右も左

もわからない私でしたのに、一から教えていただいた……」

「そつだつたね。なにしろ、アルバイト募集の広告を出し

たら、その日のうちに君がやって来た。少しは客商売の心得

があるのかと思つたら、全くなし。バーなんか入つたことも

ないと聞いて、どつしよつかと、正直迷つたよ」ふたりは顔

を見合せて笑つた。

「いやいや、来てもらつたら君は仕事の飲み込みは早いし、
客扱いもなかなか上手だったから、あつという間に売れつ子
に」

「まあ、そんな、嫌ですわ」

「ところで、いつからこの店を？ 確か七、八年前だつた

か、和食の店を始めたと聞いていたのだが」

「事情があつて五年程で閉めました。それから、一年くら

いしてこのお店を始めましたの。二年ちよつと経ちました」

「そつ？」

(最近のマスコミの流行り言葉じゃないけれど、なにがあ

つたのか……だな)だが、N子の表情は、それ以上尋ねて欲

しくないと言つていた。

(たしか結婚していた筈だが、離婚したのか或いは……?)

胸中をよぎつた疑問を意識から閉め出してKは言った。

「とにかくまずはこの偶然の再会を祝いたいね。そつだ、
例のスノーエンジェルを頼もつか」

「まあ、覚えていてくださつたのですか」

「そつさ、あれは君の最も良くできたオリジナルカクテル

じゃないか」

「いえ、ご指導の賜物です」

バックバーを眺め渡したKの眼を惹いたのは林檎のブラン

デーとして知られているカルバドスの、それも年代ものが驚くほど何本も並んでいることだった。できたカクテルを一口含んだKは視線を上げた。

「うん、このスノーエンジェルを久しぶりに飲んだが、やはり言いよ、これは」

「有難うございます」笑顔が浮かんだ。

扉が開いて、女性客がふたり、常連らしくN子と親しげに挨拶を交わし、奥のスツールに向かった。

「カルバドスを随分揃えているけど、なにか頂こうか」



「承知いたしました」

バックバーを見渡しながらN子の胸中に昔の思い出が甦った。

（あの頃のKさんは美しい女性たちが何人もいた。私などが入る余地などなかった）

ほろ苦い想いが胸を突いた。奥のほうから一本の壺を取りだすと大事にしている洒落たグラスに静かに注いだ。

「1990年のです」

（これは、秘めた想いを胸に、あなたのもとから去った年のものなのよ）N子は心のなかでそっと呟いた。

「実にまろやかな口当たりだ。香りもいいし、素晴らしい」

Kはその年号の意味に気がつかなかった。何種類か年代ものを飲んだなかで、1955年のが特にKを喜ばせた。

気がつくのと、カウンターは満席になっていた。Kはいつになく酔った。

「じゃ、機会があつたら、また来る」

扉まで送って出てきたN子は長すぎるくらいKを見つめると、小さな声で言った。

「あつたら、ではなく、作って下さいね」

店を出たKは歩きながらN子の言葉を反芻していた。火照った頬を撫でて過ぎるそよ風がなぜかN子の息吹のように感じられた。